

WS-9

マインドフルネスで育むプロフェッショナリズム教育実践大会！

日時：2026 年 6 月 7 日（日） 9:00 ～ 12:00

企画：土屋静馬（昭和医科大学）、三好智子（京都大学）、三原弘（札幌医科大学）、
毛利貴子（奈良県立医科大学）

対象

医学・歯学・看護学・薬学をはじめとする医療者教育に携わる教員、臨床指導者、教育担当者を対象とした。特に、プロフェッショナル教育、Professional Identity Formation (PIF)、セルフケア、レジリエンス教育、Whole Person Care、マインドフルネス教育に関心をもち、教育実践へ導入したいと考える参加者を対象とした。

概要

近年、医療者には高度な知識や技能だけでなく、患者・家族、多職種、さらには自分自身を支える力が求められている。国内のモデル・コア・カリキュラムや海外の CanMEDS においても、セルフケアやレジリエンス、リフレクションを含めたプロフェッショナリズムが重要なコンピテンシーとして位置づけられている。一方で、「重要性は理解できるが、具体的にどのように教育すればよいかわからない」という教育者の悩みも少なくない。

本ワークショップでは、札幌医科大学、昭和医科大学、京都大学医学部等における教育実践を紹介するとともに、Whole Person Care やマインドフルネスを基盤とした教育の考え方を共有した。その後、参加者自身が教育現場における課題や障壁を整理し、「自分ならどのような授業を構築するか」をテーマとした

グループワークを行った。参加者同士の対話を通して、教育実践の具体的なアイデアを共有し、それぞれの教育現場へ持ち帰るためのヒントを得ることを目的とした。

報告概略

本ワークショップは、講義による知識提供だけでなく、参加者自身が考え、対話し、自施設での教育実践へと結び付けることを重視した構成で実施した。

冒頭では、「患者を支える」、「家族を支える」、「チームを支える」だけでなく、「自分自身を支える医療者をどのように育てるのか」という問いを提示した。続いて、令和 4 年度モデル・コア・カリキュラムや CanMEDS において、セルフケアやレジリエンス、リフレクションがプロフェッショナリズムの重要な要素として位置づけられていることを紹介し、本ワークショップの目的を共有した。参加者には、「マインドフルネスの基本的な考え方を理解すること」「教育現場の課題や障壁を言語化すること」「他大学の教育実践から新たな視点を得ること」「自分自身の教育実践を構想すること」の 4 点を到達目標として提示した。

前半では 3 つの講演による教育実践を紹介した。三原弘氏（札幌医科大学）は、マインドフルネスを取り入れた医学生教育について報告し、学習者が自己理解を深めることの重要

性を紹介した。続いて土屋静馬氏（昭和医科大学）は、昭和医科大学における Whole Person Care 教育を紹介した。マギル大学トム・ハッチンソン教授の考え方を基盤に、「問題を解決すること」だけではなく、「患者とともに“いま・ここ”にいること」の教育的意義を解説した。また、「人の意識が人の意識に向けられて初めて関係性が成立する」という視点から、医学生を対象とした PIF 教育、マインドフルネス教育、援助的コミュニケーション教育の実践例を提示した。さらに三好智子氏（京都大学）は、実際の教育現場でのマインドフルネス実践について紹介し、教育効果や導入上の工夫について共有した。3 つの講演後には質疑応答を行い、「医学教育にどのように組み込めばよいか」「講堂で多人数向けにどう実践できるのか」「宗教的な印象をどのように払拭するか」など、多くの質問が寄せられた。参加者からは、自大学でも導入を検討したいという前向きな意見が数多く聞かれた。

後半ではワーク 1 として、「マインドフルネス」「セルフケア・レジリエンス」「プロフェッショナリズム」の教育実践における課題や障壁についてグループ討議を行った。各グループでは、「自分自身が十分学んでいない」「教員不足」「授業時間が確保できない」「教育効果の評価方法が難しい」「学生から宗教的な内容と誤解される可能性がある」など、多様な

課題が共有された。一方で、それらの課題は多くの大学に共通するものであり、他施設の実践例を共有すること自体が教育者にとって大きな支援となることが確認された。

続くワーク 2 では、「自分ならどのような授業をつくるか」をテーマに、対象学習者、授業目的、教育方法、期待される学習成果を各自で設計した。医学部低学年の PIF 教育、臨床実習前後のリフレクション、多職種連携教育、研修医教育、教職員 FD など、参加者の所属に応じた多彩な授業案が提案された。各グループでの共有後には全体討議を行い、短時間でも実践可能なプログラム設計や、既存カリキュラムへの組み込み方などについて活発な議論が行われた。最後に、マインドフルネスは単なるリラクゼーション技法ではなく、患者理解、自己理解、Professional Identity Formation を支える教育手法であることを確認した。また、教育実践を共有し、教育者同士が安心して課題を語り合える場そのものが、今後のプロフェッショナリズム教育の発展に重要であることが共有された。参加者からは、「明日からの授業で実践したい」「自大学でも取り組みを始めたい」「他大学とのネットワークを継続したい」といった感想が寄せられ、本ワークショップの目的は概ね達成されたと考えられた。

スケジュール

時間	内容	詳細	担当
9:00-9:15 (15 分)	導入	趣旨説明、自己紹介、問題提起	土屋
9:15-9:30 (15 分)	講演 1	札幌医科大学の場合	三原
9:30-9:45 (15 分)	講演 2	昭和医科大学の場合	土屋
9:45-10:00 (15 分)	講演 3	岡山大学/京都大学の場合	三好
10:00-10:10 (10 分)	講演 1～3 質疑応答	全体討論	司会：毛利
10:10-10:20 (10 分)	休憩		
10:20-10:25 (5 分)	ワーク①説明 「セルフケア教育実践の私の”壁”」	目的・進め方説明	土屋
10:25-10:45 (20 分)	グループワーク①	自己紹介＋課題共有 A：三原、B：三好、C：毛利	
10:45-10:57 (12 分)	グループ発表	発表：3 グループ × 4 分	土屋
10:57-11:10 (13 分)	全体討議	共通課題・次の方向性の整理	土屋
11:10-11:15 (5 分)	ワーク②説明	自分ならどう 1 コマを作るか	土屋
11:15-11:25 (10 分)	セルフワーク	個人で授業アイデアを整理	
11:25-11:40 (15 分)	グループ内発表	グループ内でアイデア共有 A：三原、B：三好、C：毛利	
11:40-11:50 (15 分)	全体討議		土屋
11:50-11:55 (5 分)	まとめ講義・総括	Take-home message	土屋
11:55-12:00 (5 分)	写真撮影		